

講話の内容

①	残された家族～家族を戦争で失くした人たちの思い～	小学校5年生から一般
	戦争を知らない世代には馴染みのない「遺児」を取り上げた講話です。境遇の異なる3名の思いや、家族が亡くなった地へ「慰霊」のために訪れること等にもふれ、辛い体験をしながら生きてきた人達の気持ちに近づくことで、戦争への理解を深めてもらう内容となっています。	
②	国策紙芝居で知る銃後の生活	小学校6年生から一般
	戦時中に戦意発揚や戦争教育のために作成された国策紙芝居。国策紙芝居の一つである『ナカヨシバウクゴウ』を取り上げ、実演に加えて紙芝居に登場する防空用語、空襲の備え等について解説します。また、東京大空襲の体験談を紹介し、実際の空襲は紙芝居に描かれてたものとは異なり、多くの被害・犠牲者が出たことを伝えます。	
③	戦争と動物～戦争で犠牲になった動物たち～	小学校高学年から一般
	戦争中には、多くの動物たちも犠牲となりました。戦争のために使用された軍用動物や動物園の猛獣処分、国に供出された犬猫たちのことについて、関わった人達の悲しみや苦しみなども交えながらお話しします。	
④	聞こえない人と戦争	小学生から中学生
	コーダーである話者が、当時のろう者の生活を伝えます。当時の聾学校の様子や徴兵検査での体験談、さらには聞こえない人たちが多く採用されていた民間軍需工場「尼崎精工」での労働者たちの奮闘ぶりや聞こえない子どもの東京大空襲時の体験談などを、手話を交えて語ります。	
⑤	戦災孤児たちの願い～もしも魔法が使えたら～	小学校6年生から中学生
	神戸空襲で両親を亡くした山田清一郎さんの壮絶な体験を、戦災孤児だった女性が描いた絵とともに朗読形式で語ります。同時に、戦災孤児の数や支援の状況についても説明し、彼らの生活がいかに困難を伴うものであったかを伝えます。	
⑥	戦中の小学生	小学校高学年から中学生
	昭和8年(1933)、東京の本所区(現・墨田区)に生まれた架空の男の子を主人公に、日中戦争が始まった昭和12年から昭和20年8月15日の終戦までのできごとを年代順に解説します。「奉安殿」「慰問袋」「防空壕」「学童疎開」「東京大空襲」「玉音放送」など、それぞれのキーワードを小中学生向けに分かりやすい言葉でお伝えします。	
⑦	沖縄の光と影～今を支える戦争の記憶～	小学校高学年から中学生
	沖縄の光と影を照らしながら、今と昔を比較し、その変遷を感じさせる講話です。新垣文子さんの体験を通して、戦争を生き抜いた一人の女性の心情と強さを深く伝えます。	
⑧	学校生活と子どもたち（戦前・戦中編）	小学校6年生から中高生
	尋常小学校から国民学校へと変わった昭和16年(1941)から昭和20年8月15日の終戦までの、国民学校での子どもたちの授業内容や生活をメインにした講話です。「徴兵検査」や「代用品」、「教育勅語」など、子どもたちを取り巻く日常で使われていた用語を分かりやすく解説。学童疎開の話では、疎開先での子どもたちの暮らしぶりや苦労を、体験者のエピソードを交えて伝えます。	
⑨	少女の戦中・戦後の暮らし～島本京子さんの体験から～	小学校6年生から中学生
	太平洋戦争が始まる昭和16年(1941)に国民学校に入学した島本京子さんの体験を中心に、当時の学校生活について語ります。授業内容や学童疎開といった戦争中の生活に加えて、戦争が終わってからの学校の様子について、島本さんの資料も紹介しながら分かりやすく伝えます。	
⑩	戦時下の中学生～学校生活と学徒勤労動員～	小学校6年生から一般
	夢や学校生活、人生そのものが戦争に翻弄された戦時下の中学生、前沢正巳さんの学校生活と学徒勤労動員の体験を伝えます。戦後は小学校の教員となった前沢さんの体験を通して、「自分の目で見ても自分の頭で考える事が大切だ」ということも感じてもらえる内容となっています。	

	ぼくの家にも戦争があった	小学校中学年から中学生
⑪	語り部自身の家族の戦中・戦後の暮らしを調査し、当時の時代背景や出来事とともに語る講話です。語り部の父親が体験した、学童疎開、横浜大空襲、そして、戦後占領期の暮らしを伝え、どこ家族にも戦争が身近にあったことを気付かせる内容になっています。	
	軍国少年の戦中・戦後 ～終戦時13歳の今吉孝夫さんの体験を中心として～	小学校高学年 中学生から一般
⑫	満洲事変の翌年の昭和7年(1932)に鹿児島に生まれ、13歳、中学1年生で終戦を経験した今吉孝夫さんの実体験を中心に、同級生の小向得庇さんの体験を交えながら、将来は国のために戦争で戦う陸軍や海軍の軍人になりたいと考えていた軍国少年たちの戦中、戦後を伝えます。	
	学童疎開－戦時下の親元を離れての集団生活－	小学校高学年
⑬	語り部自身の身内である叔父さん・叔母さんの学童疎開の体験を中心にした講話です。都内から、静岡県や富山県のお寺へ疎開した児童たちが、疎開先でどのように勉強をしていたのか、どんなものを食べていたのか等、具体的な体験談を盛り込み分かりやすく語ります。	
	戦中の子どもの学校生活～昭和8年生まれの子どもたち～	小学校高学年
⑭	昭和8年(1933)生まれの架空の主人公が、昭和15年4月に尋常小学校に入学し、昭和20年8月15日に国民学校6年生で終戦を迎えるまでの学校生活を紹介します。教育制度の変化や学童疎開先での生活を戦争体験者の話を通して、写真や教科書の画像を使いながら、子どもたちに分かりやすく伝えます。	
	空白の3年8か月～天気予報と戦争	中学生から一般
⑮	気象予報士が太平洋戦争時代の天気予報と戦争の関わりについて語ります。日本での天気予報の歴史を振り返り、戦時中に天気予報が制限された期間に焦点を当てます。天気予報のない期間が、日常生活や戦争の展開にどのような影響を与えたかを考察し、台風や東京大空襲などの出来事と天候の関連性について解説します。	
	軍事郵便を聞く	中学生から一般
⑯	戦地にいる夫、吉田貞治さんとその妻であるとらさんとの間で交わされた手紙に焦点を当てた講話です。朗読形式で貞治さんととらさんのやり取りを紹介し、軍事郵便の役割や成り立ちを解説。兵士と家族の思いが伝わる内容となっています。	
	戦争と学生	大学生から一般
⑰	戦時中の大学生たちの心境と学業への影響に焦点を当てます。戦況の悪化に伴い、授業が中断されたり勤労働員されたりする学生たちの実情や、徴兵猶予の停止を受けて出征する学徒の思いなどを紹介し、「最後の早慶戦」と呼ばれる試合が行われたエピソードも取り上げます。	
	熱田空襲下の学徒動員体験記 ～航空機製造へ舵を切った愛知時計電機～	大学生から一般
⑱	語り部自身が時計雑誌の編集に携わっていたことから、航空機製造へと舵を切った時計メーカー「愛知時計電機」に着目。戦争に積極的に協力した愛知時計電機と、その工場で働いた学徒をテーマにして、学徒動員や学徒たちの空襲体験を伝えます。	
	フミちゃんと沖縄戦－それでも私は生きる－	大学生・一般
⑲	激しい沖縄戦を生き抜いた新垣文子さんの体験を中心にした講話です。戦争で大きな傷を負った新垣さんの心情的揺らぎや強さを語ります。新垣さんは、昭和館が制作しているオーラルヒストリーのお一人で、「不幸にあっても、人生を切り開く勇気を持って欲しい、そう伝えることが私の使命」と作品の中では話されています。	
	白米が憧れだった頃 －戦中・戦後の人びとの米への強い思い－	一般
⑳	歴史学専攻の語り部が選んだテーマは「白米」。昭和13年(1938)の節米運動や配給制度、当時の食糧事情を紹介し、白米の貴重さや終戦後の食糧難を振り返ります。自身も実際に米つきを行ったり代用食を作ったりした経験を交え、幅広い世代に分かりやすく伝えます。	